

井戸端だより

第 66 号

発行日： 2009.6.22

発行： ぐらしの学習会

時間の問題だとは思っていましたが、ついに愛媛県からも感染者が出た新型インフルエンザ。これに先立ち、南半球の流行を受けて、この新型インフルエンザの警戒レベルが世界的大流行(パンデミック)の宣言を意味するフェーズ6に引き上げられました。WHOは一方では過剰反応を戒めており、「渡航・貿易制限や国境閉鎖はすべきでない」と警告しています。しかし、グローバル化した現在、世界経済のみならず市民生活にも少なからず影響が出るのは必至でしょう。完全な世界的終息を願うばかりです。

66号の会報をお届けします。読んでいただき、何かを感じていただければ幸いです。

目 次



- | | |
|-------------------------|--------------|
| ・4月例会報告 |P.2~3 |
| ・5月例会報告 |P.4 |
| ・6月例会報告<出会い塾> |P.5~6 |
| ・倉敷・ぐらしき・クラシキ・KURASHIKI |P.7~11 |
| ・キジバトの巣立ち |P.12~13 |
| ・さつき展 |P.14 |
| ・楽しい!!わくわく*ドキドキ |P.15~16 |
| ・雑感 |P.17~19 |
| ・お知らせ・編集後記 |P. 20 |

<4月例会> ～ 椿 桜 俳句の里を訪ねて ～

参加会員数 6名

4月7日、午前10時にHさん宅を出発。まず、先月の例会で見た藪椿を、再度見たいという会員の意見が一致したので、研修センターへ行きました。個人的には、先月は不参加でしたので、ラッキーでした。ピンク色の椿は、たくさん花をつけていました。先月とは、比べ物にならなかったようで、再度の訪問が適時になりました。ここでの見学者は私達だけです。いつもデジカメを持ってくる会員の前でポーズをとりながら、いろいろな話が出ました。原種の椿もさることながら、研修センターは、桜の花が散り時で、ピンクの絨毯を掃除している方がいました。掃除しなくてもいいのになあと思いながら、日本人だからこそ魅了される桜の花びらが舞う風景の中で、鳥のさえずりとひらひら舞い落ちる空間に癒されました。

その後、櫻を求めて、薄墨桜で有名な西法寺に行きました。花の名前の由来は、約1300年前に、天武天皇から病氣治癒祈願に下賜された桜が、薄墨色の繪旨に包まれていたことから、薄墨桜という名になったそうです。ここは、花が散る直前の満開時期と重なり、他の見学者の方々もいて、にぎやかでした。薄墨桜は、色や花びらが他にはない、貴重で本当に珍しい花なのだそうです。櫻茶を売っていましたが求めましたが、買った後で、櫻茶の花びらは、薄墨櫻の物ではないとわかり、少し、残念な気分になりました。

続いて、栗田樗堂（1749～1814）の庚申庵へ行きました。NPO 法人が設立され、実に立派です。壊れかけの古びた庵ではありませんでした。藤の季節には少し早かったのですが、建物が改築されていて、家の中にも自由に入れるので、小さな部屋から外の空気を吸って吟行を練る俳句の世界を感じました。樗堂は、江戸時代、松山藩の重責にあった人ですが、小林一茶（1763～1827）に、俳句を指南したこともあるほど有名な俳人でした。室町時代の連歌から発展した俳句は江戸時代の芭蕉（1644～1694）の作品以後、文学的な価値があると子規（1867～1902）は指摘します。奥の細道はもっとも代表的な作品とされています。芭蕉を愛し憧れた蕪村（1716～1784）は子規の俳句革命に最も影響を与えた人で、奥の細道の墨絵（俳画）でも有名です。

この時代の富裕層の人達は、発句に夢中になり、樗堂の周りも、俳人が多くいたようです。彼は、52歳で、庚申庵を造りましたが、思うに任せない世間に逆らうように、53歳で、松山を離れて、瀬戸内の大島下島の御手洗で暮しました。当時の御手洗は、風待ち、潮待ちで有名な港町で、西回りの松前船の寄港地だったそうです。その名残の建物は現存していて、観光名所としての役割に代わっています。樗堂のお墓は松山だけではなく、御手洗にもあります。彼

の、鞆の浦にも勝る港町での晩年の暮らしはどうだったのでしょうか。生まれ育った地を、晩年に離れて暮らす生き方には、心の自由さを感じられます。

四月例会は盛りだくさんで、この後、山頭火（1882～1940）の一草庵へも行きました。彼の自由律俳句は多くの人に愛されています。明治時代、俳句に文学的価値を吹き込んだ子規からの流れは高浜虚子と河東碧梧桐ですが、山頭火は、「層雲」の碧梧堂や井泉水の流れのなかに入ります。無くなる一年前から、松山に暮したのも、子規や碧梧堂が詠んだ松山で暮したかったからだと思います。自分が憧れる人が見たであろう風景や感じたであろう人情にふれたかったのではないかと想像しました。最晩年を暮らす終の棲家が松山だったのです。

行乞の山頭火を援助したのは、現在の松山大学の教員だった高橋一洵（1899～1957）でした。住む家を提供し、その後の生活を支えた高橋や「層雲」関係者の人々の人間くささが心に染み入りました。亡くなる前の日、句会と酒会で楽しい時間を過ごした山頭火。ころりと死ねるならと望んだそのままの最期に、死の悲しみよりも、静かな最期を迎えられたことに、無常の意味を素直に受け入れられました。高橋一洵と山頭火の俳句が、向かい合っている碑があると聞いて、又、行きたくなりました。山頭火のお墓は山口県防府市の護国寺と離婚した奥さんと子供が住んでいた熊本県の二ヶ所にあり、松山にはありません。彼は死して後、故郷に帰りました。

一草庵には、観光ボランティアガイドさん達が活躍されています。この日は平日でしたので会えませんでした。熱心に取り組んでいる様子に、松山市が日本でも有名な観光都市になれるかもと期待が膨らみました。

この後、近くにロシア人墓地があるはずだと捜しました。少し、時間がかかりましたが、何とか、辿り着きました。墓地は、報道されているように、きれいに清掃されていて、日本の誇りの場所だと感じられました。当時の捕虜はマツヤマという言葉を知っていて、捕虜になったら松山に行くことを希望しました。松山での捕虜の待遇がとても良いという噂がロシアの人々には知られていたそうです。しかし、亡くなられた人々も多くいたのですから、異国での暮らしはつらいものだったでしょう。墓石に刻まれた名前と年令から受ける印象は悲しいとしか言い表せません。

ここで、偶然ですが、足立重信翁のお墓を見つけました。重信川の氾濫を防いだ翁の名前には懐かしさがあります。その場から立ち去れない気持ちになり、手をあわせました。

今月は盛りだくさんの例会になりました。3月の子規塾の講演後、行きたかった場所の訪問に、充実感がありました。会員のみなさん、お疲れ様でした。

Hさん、車の運転、ありがとうございました。

(M T)

<5月例会報告>

5月13日(水) 12:30 三越に5人が集合し昼食を取ってから、『第55回記念 萬翠荘バラ展』と『再興第93回 院展』を楽しむことにしました。

修復終了後初めて訪れた萬翠荘でしたが、どこをどう修復したのかめったと訪れることが無い場所なので分かりませんが、以前のイメージ通りレトロな雰囲気そのままバラがとても似合っています。入り口には「オールドローズ」が出迎えてくれ、建物に入るとバラの香りに包まれます。それにしても人の多さに驚き、丹精込めて育てられたお花を人の流れに身を任せながら見る状態です。淡いベビーピンクとクリーム色で小さく可憐なバラが個人的には好きなのですが、まるで牡丹のような大きな物、1cmほどのミニチュアローズで一つ一つが大輪の花のような物、一重の可憐な花をまるで枝垂桜の様に仕立てられた物、色もスタンダードカラーの中にシックなブラウン系・淡いグリーン系・青ばい紫系など色とりどりの花々が目を楽しませてくれました。ただ、とても不自然なスカイブルーの物があって「白バラに着色した水を吸わせて色付けした物なの？ そうだとしたら枯さないように色付けさせるための技が必要なの？」その場でどなたかに聞けば良かったのですが違っていたら御免なさい。たくさんバラに囲まれたステキな時間でした。

続いて、三越で開催されている『院展』会場へ。1914年に再興第1回院展を開催以来、近代日本画壇の発展に輝かしい足跡を残してきた「院展」。郷倉和子氏・平山郁夫氏をはじめとする同人作品32点、招待・受賞・入選作品など41点の計73点を展覧(パンフレットより)

7階会場へ入ると襖二枚大の日本画がズラリ。何枚か見て行く内、先の方で声がするので進んで行くと大勢の人が絵を囲み誰かの説明を聞いている様子。この日14時00分から日本美術院同人(松尾敏男氏・下田義寛氏・那波多目功一氏・西田俊英氏)の方々による作品解説が行われている所に遭遇し、とてもラッキーでした。作家自身によるご自身の作品の解説を聞くのは初めてでしたが、エピソードを交えながら分かりやすく話され、おまけに同人の方々が会話を交わしながら進行していきます。今回入選された若い作家五人の作品についても、先輩としての厳しくも暖かい言葉で論じ合い、彼等にとって励みになったのではないかと感じました。中でも 長原 勲氏24才(初入選)の作品は高評価でした。新生 加奈氏の優しい黄色の中に母子を描いた作品もステキでした。日本画の世界にも若い作家がたくさん生まれている事を知る機会になりました。

その後、お茶をしながら6月の予定を決め(東温市在住インドネシアの方のお話を聞く)事とし、しばしお喋りをして解散しました。 A. M

<6月例会> ～ 出会い塾 太田リリスさん ～

参加人数 会員7名とリリスさん

10日の午後1時からHさん宅で、久しぶりに出会い塾が開かれました。今回は、インドネシアで御主人と出会い、結婚されて約11年、太田リリスさんとの出会いでした。異国から来られた印象を全く与えない、日本人社会で苦勞しながら、色んな事を乗り越えた幸せを一目で理解できました。

日本人と結婚し、日本で暮らす道を選択したこと、今は、本当に幸せですと話される魅力的な女性でした。小学校に通う女の子と御主人との3人家族の生活のお話は、私達まで幸せな気持ちにさせていただきました。

今年、小学校の役員（じゃんけんで負けたそうです、学年部、同和部会の部長の役）を受けた前向きな気持ちは、言葉の不自由さのために、わからないこともあるけれども一生懸命です。じゃんけんの仕方もよくわからないで、負けたそうです。そして、部会の部長役まで受けた彼女のパワー。がんばれと心から応援したい気持ちになりました。

彼女は、日本の国は税金が適正に使われていますと話されました。ゴミ袋を無料配布してくれることや、先日の¥12,000-の給付金が印象深かったようですが、日本人には色んな考え方があり、¥12,000-の使い方も、もっと、国が良くなる事に使って欲しかったという意見がありますと隣の席の会員が話すと、そういう意見を聞いたことがなかったけれども、日本人社会には色んな考え方があると理解されたようでした。心の中の深い場所で、異文化を理解しようとしているのでしょう。

結婚当初には色々大変な思いも経験されて、言葉の失敗談 <お昼ごろ、お店に入ると、店員さんが「いらっしやいませ。」といたので、リリスさんも、「いらっしやいませ。」と言ったら、お店の人が怪訝そうな顔をしたので、御主人が帰宅後に、それを話して、(いらっしやいませ)は(こんにちは)ではないと理解した> は、言葉がわからないとはそういうことだと納得しました。義理のお母様との関係も、彼女なりに努力と工夫を重ねていて、ユーモアもあり、より良い関係を築いていると感じました。彼女の努力もさることながら、お母様の懐の大きさを日本人として、とても誇らしく思いました。

ですが、忘れてはならない一番のポイントは、リリスさんが異国の日本に来るまでに悩まれたことやお母様が御心配されたことは、リリスさんの御主人の愛情には勝らなかったという事です。仕事でインドネシアに赴任された御主人は部下だった彼女がいたからこそ、不安な外国生活も乗り越えられたのでしょう。帰国後、電話でプロポーズした御主人のアプローチ。

当時のことを嬉しそうに話されるリスさん。私にはそんなことあったかしら??と、夫の愛情が軽いなあと、つい、思ってしまった。でも、私の夫への愛情はどうかと聞かれると、夫ばかりは責められません。(笑)

肌の色や言葉や国の習慣や宗教は、人への愛情の前では、何も問題ではないとリスさんの家族が示されています。

異国で暮らすという道を選んでも、年月が過ぎるにつれ、国が恋しくなるものですが、リスさんは愛媛で暮らしているインドネシアの方々とも交流しながら、自分の人生の選択が間違っていなかったと心から話されていました。幸せな人はそこにいるだけでも、周りの人をやさしくしてくれます。リスさんが言いました。又、誘ってくださいと。それは儀礼的な言い方ではなく、彼女にとっても楽しい時間だったのでしょ。そして、リスさんとの出会いは、人への愛情を持つ幸せを再認識させられた日になりました。会員の皆さん、夕食のグレードが少し違いませんでしたか。

リスさんはジャカルタ出身です。



(インドネシア共和国)

首都 ジャカルタ

人口 約 2.28 億人 [2008 年]

面積 日本の約 5 倍 約 189 平方キロメートル

民族 大半がマレー、ジャワ、他 27 種族

宗教 イスラム 88.6% キリスト 8.9% ヒンズー 1.7% 他

日本とは非常につながりの強い国です。インドネシアの対輸出国一位が日本であり、国の全輸出の四分の一は日本向けです。

(M T)

〈倉敷・くらしき・クラシキ・KURASIKI〉

3月20日～22日の連休を利用して倉敷へ一泊のんびりドライブ旅行に行ってきました。指折り数えてみると13年振り4回目です。目的は『大原美術館』の名画たちに出会う為、夫の両親を2007年10月と2008年3月に見送り、住まいの片付けの日々の気分転換の為、外に出ている息子と家族のコミュニケーションを兼ねて出かけました。

出発の当日、本四架橋通行料がETC搭載車1000円の初日で『しまなみ海道』の混雑を心配していたのですが案外スムーズに走れましたが、立ち寄ったサービスエリアの駐車場は混んでいました。1000円効果だったのでしょうか？因みに我が家は、色々な意味でETC優遇制度に疑問を感じているので搭載せず、空いている料金所で支払い、料金所の人に「頑張って」エールをかけてきました。あちら側はどう感じたかは分かりませんが「ありがとうございます」との元気な返事があった事を記しておきます。今回、何度か訪れた倉敷の思い出と変わっていった様子を私なりの視線で振り返ってみることにしました。どうぞお付き合い下さい。

初回1975年5月結婚前（75年9月結婚）だったので日帰り強行スケジュールでした。予讃線（西条～高松）－宇高連絡船－宇野線（宇野～茶屋町）－バスで倉敷駅の往復コースで、家を暗いうちに出発し、食事は移動中に、夜遅く帰宅、若かったから出来たことでした。移動に時間がかかった為『大原美術館』と倉敷川美観地区をサッと見て回りあまり強い印象を受けなかったのですが、次回は印象に残った『アイビースクエア』に泊まり、ゆっくり美観地区を歩き、じっくり美術鑑賞をしよう決めました。本格的な美術館を訪れたのはこれが初めてでした。

二回目結婚した翌年1976年5月、今回は車で『アイビースクエア』で一泊のスケジュールでした。R11（松山～丸亀）－フェリー（丸亀～下津井）－R430～R2（下津井～倉敷）のコースでした。フェリーの乗り降りに要する時間・混雑した一般道の走行でのドライブ旅行は、あの時代普通のことでした。こうしてみると、本四架橋事業は四国の住民にとって有り難かったと思いますが3本も必要だったのでしょうか？岡山城に寄り道をして倉敷入り『アイビースクエア』へ駐車をし早速一つ目の目的地『大原美術館』へ。

ゆっくり、じっくり時間をたっぷり取り、美術の教科書に掲載されていた巨匠たちの作品と同じ空間を楽しみました。中でも二人のお気に入りには モネの『睡蓮』 理屈抜きでいつまでも眺めていたい、又『睡蓮』に会いに大原に行きたいと思わせてくれます。それまで絵画を見るなど私の中には無かったのですが美術好きの夫の影響か、以来、折をみてはテレビ番組を見たり、旧愛媛県立美術館を訪れたりするようになりました。本館・分館・工芸館・東洋館を回って外へ出ると夕方になっていたことを思い出しました。

倉敷のもう一つの目的地、レトロな雰囲気が漂う倉敷アイビースクエアは幕府代官所の跡に1889年に建てられた倉敷紡績工場を再開発し、敷地内にはホテルを含め素敵な楽しみ方ができるスポットがあります。赤煉瓦造りのアーチ型の正門をくぐり、蔦のからまる建物の中はとても落ち着く感じの雰囲気。チェックインをし通された105号の部屋も余計な飾り気の無いすっきりとした調度品でまとめられていて素敵でした。絵画の余韻に浸りながらホテル内のレストランで少し早めの夕食を取り、まだ外は夕暮れ時のいい感じの明るさだったので美観地区の散策に出してみました。倉敷川沿いにある薄暗い街灯の付近だけがぼんやりと明るく、大半のお店は閉店。ちょっと肩透かしを食った気はしましたが、昼間とは違った一面が見られた幸運を味わいながらホテルに帰りました。33年経ってもあの光景は忘れたくない思い出です。

翌朝、朝食を取りチェックアウトをし荷物を車に乗せ、裏通りの散策へ。美観地区から一步路地を入ると昔ながらの古い家並が続く本町、東町通り。白壁になまこ壁の老舗の酒蔵や、倉敷窓に倉敷格子のある古い町屋が見られます。ここに住む住人の普段の生活を垣間見た気がしました。通り沿いの阿智神社も素敵でした。裏通りから倉敷駅まで商店街（えびす通り）が続きます。普段着の商店街の中に気になるお店発見。革製のアクセサリを作りながら販売している店。自分への御土産として可愛いお顔のブローチを買いました（布のバックに付けて大切にしていたのに数年前いずれともなくいなくなりました）可愛い額や小さなインテリアを扱う店。黄昏色で雪帽子を被った家に星が瞬く（メルヘンチックな）10cm程度のちいさな額飾りを買いました（今もテレビの近くで温度計として居続けています）これらをお土産に帰路に就きました。三度目訪れたのは20年後になります。

三回目1996年8月、この間結婚後7年目にして親となり子育てに動しみながら、くらしの学習会・生協活動・地域活動など忙しい日々を過ごし20年が経っていました。今回は家族三人、R11（重信～坂出）－瀬戸大橋－岡山－新見市－倉敷へ。子供の夏休みのお楽しみとして日本三大鍾乳洞の一つ、新見市の井倉洞（全長1200m 高低差約90m 地軸の滝・音の滝から流れ落ちる水音が反響し迫力満点）や満奇洞（『八つ墓村』のロケ地で奥にある洞内湖が静寂の中で清水をたたえている。与謝野鉄幹・晶子夫婦が訪れ“奇趣に満ちた洞”と激賛しこの名が付いた）を堪能し、清音温泉で一泊し、（ここで初めて きじ料理 をいただきました）翌日倉敷へ。

ちょうどこの年「倉敷チボリ公園」がオープン。そのせいか街中はざわつき、若者に好まれそうな店が多く開店し、20年の月日を感じさせられました。朝一番『大原美術館』へ入館。1990年会館60周年を記念して本館を拡張し、西洋の近代から現代に至る絵画・彫刻を展示、ゆとりを持たせた内容に変化していました。ただ広がった分時間がかかり、小休止をする為一度外へ出て、甘味を補充し再入館、すべてを見終えるのに3時間程度費やしていました。あんなにたくさんの巨匠たちの作品を目の当たりにした息子に昼食を取りながら「印象に残った作品はあった？」と聞くと「ジャコモッティの彫刻とルオーの＜青い鼻の道化師＞が良かった」との返事。お土産として買った絵葉書を今見返してみると、ピカソ・フォートリエが2枚ずつあったので彼なりの感性で楽しめたのでしょう。これ以降、近場で開催される美術展を無理強いしない程度に出かけるようになりました。私は『心の栄養』と言っていますが、様々な感動を心に少しずつためていってくれればと思っています。

四回目2009年3月、13年振りにあの名画達に会いたくて予定を立てたので就職し家を出ている息子に声を掛けてみると行くとの返事。宿泊場所を温泉地かアイビースクエアのチョイスに「倉敷を楽しみたい」と言う事でアイビースクエアに決定。3連休の初日の夜3/20予約が取れ、行きは『しまなみ海道』を渡り、帰りは『瀬戸大橋』経由と決め出かけました。どこにも寄り道をしなければ4時間弱で倉敷到着。四国にも高速が出来、これまでのような混雑する一般道やフェリー待ちの時間を考えると便利になったものだと痛感しました。96年オープンした『倉敷チボリ公園』は08年12月をもって閉園。

この間訪れる事が無かった倉敷の変化を楽しみに『アイビースクエア』にチェックインをし早速美観地区へ。予約をしてから分かった事なのですが3/18～3/22の間<倉敷春宵あかり>春を見つけにあかりをめぐる…暮れなずむ街の五日間 と称したイベントが行われていて、昼間も観光客を楽しませてくれそうな行事が展開され、三連休とも合わさって観光客がとて多くごった返していました。昼食をとり（カプチーノ仕立てのスープが珍しく美味しかった）『大原美術館』へ。大人1000円は変わらず。一日有効で何度でも入館可能、音声ガイド（博物館系ならば借りるが美術系では借りないのが我が家流）も導入されていた。分館が改装され全体的にゆったりした感じを受けました。モネの作品が2枚に増えていたり、美術番組で知った建物や作品に関するエピソードを思い出しながら、それぞれが楽しみにしていた作品を堪能しました。館内のミュージアムショップでグッズを買って外へ出ました。

予定していた夕食までには時間早かったので、美観地区の北側に約500m続く本町通り～東町へ。1976年に訪れた時のような住人の為の生活道ではなく昔ながらの町並みに古民家を再生した雑貨店やカフェ、ギャラリーなどの店が点在し、観光客のためのお洒落な通りに変わっていました。が、素敵なショップもあり『倉敷帆布』のバックを自分のために購入しました。（17時閉店だった為翌朝再度訪れることになりました）<倉敷春宵あかり>の準備をしている関係者・ベストショットを探し歩くカメラマン・私たちのような観光客が数多く往来しにぎわっています。ここから倉敷駅に続くえびす通り商店街を歩いていると、以前買った皮細工の店が昭和の感じのままでありましたが、代替わりをしたのかコサージュを主流にした店舗になり、ミニ額を買った店もありましたが品揃えも随分変わっていてどちらも入ることはありませんでした。通りを抜けると倉敷駅周辺は都会的な街に再開発され美観地区も含めて洗練された町並みに全体が変わっていました。美術館グッズのショップが美観地区の通りにオープンし、入館しなくてもグッズが入手可能になっていてちょっとガッカリでした。

18時開店の鉄板焼きのお店で夕食。17年この場所でオーナー夫婦だけで営業している所で、倉敷の古い写真が掛けてあり諸々の話を聞かせてくれました。少しずつですが10種の野菜を焼いてくれたのですが、ヤーコン（甘く梨

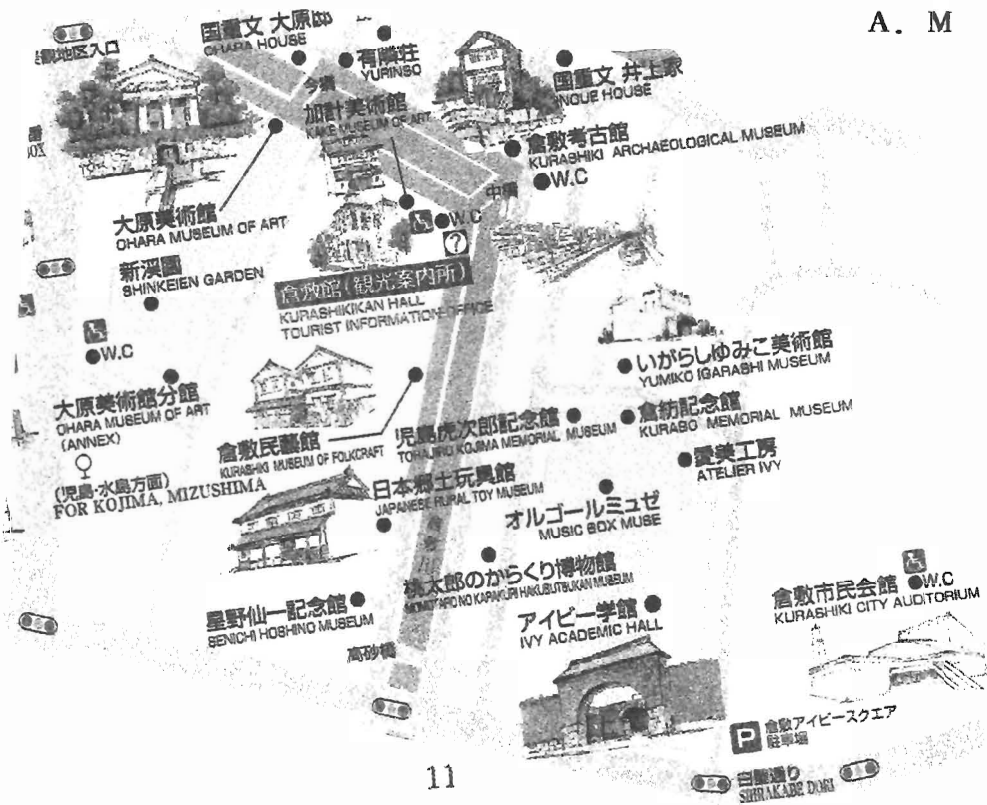
のような食感)と初めてだった島らっきょは美味しかった。シーフードとお肉のコースを食べ終わる頃には外は真っ暗になっていました。

店を出てあかりのイベントへ。白壁に川沿いの柳並木が映える倉敷川。歴史的な町並みが続く本町筋。静かなたたずまいの裏路地周辺、文化の香り漂う美術館エリアが温かくて優しいあかりで幻想的な空間に生まれ変わっていました。提灯・ぼんぼり・和傘・ろうそく・あかりで飾られた川舟が町並み・裏路地・白壁・川面など地区全体を温かなあかりが包み込み、ライブ演奏も行われていて、少し肌寒かったのですが多くの人々がゆったりとそぞろ歩き春の宵を楽しんでいました。私たちが川辺を一回りし宿へ戻りました。

部屋に帰り、お風呂に入り、涼しい風を入れようと窓を開けると、とても近い場所であかりイベントが行われていたとは感じられない静けさでした。翌朝、買い物に行くため外へ出てみると、昨夜の幻想的な光景が嘘のように普通の町並みに戻っていました。あまりイベント的な場所に出かけることのない我が家なのですが、たまにはこうした非日常の空気に身を置いてみるのもいい物だと思わせてくれた旅行でした。

4度倉敷を訪れてみて、5度目も有りかな、次回は牛窓辺りに宿泊し尋ねてみるのもいいかなと思っています。長々のお付き合いありがとうございます。

A. M



キジバトの巣立ち

4月初め、キジバトが巣を作り始めた。昨年と同じ場所、我が家の道路に面した金木屋の垣根に。昨年は、猫のケンがいるし、卵を蛇が食べに来るからと蛇嫌いの夫の意見で、巣作りは遠慮してもらった。今年また同じ場所に。「好条件」と我が家を選んでくれたのだからと、今度は楽しませて貰うことにした。

小枝を運んでき始めて4日目。もうあれで完成？ 皿状の透けてみえる粗末な巣に卵を一つ産んだ。2日後にもう一つ卵を発見。卵が落ちそう。

それから17日間、卵を抱き続けた。夫婦交代でと思っていたかったが、その間、小枝を加えて巣へ飛び込み交代したのを見たのは一度だけだった。ずっと座り続けるけなげなハトをみて、「何も食べないで大丈夫やろか、母親は大変、父親はどうしょんじゃろ」と私。夫は「父親かもしれんぞ。えさでも側へおいてやろうか」とか。・・・ 雌雄の区別もつかなくて気がもめる。

後で分かったことだが雄が日中を、雌が夜間を担当するとか。

台所仕事をしながら一日に何度すぐ側の巣を見ることやら。「大きな音をさせたらいかん。そっとしておいてやれ」とハトを気遣う夫の気持ちにもお構いなしに、すぐ側の出入り口の戸をあける音にも、私の「おはよう！」「おやすみ！」の言葉にも、目が合っても驚くこともなく、ひたすら座り続けている。

2週間を過ぎた頃、親鳥が大きく羽を膨らませた格好になった。ああっ！ 胸の下にふわふわの羽毛が見える。確かに2ついる。「やったね！！よく頑張った！」と。

その3日後から親鳥は巣を離れることが多くなった。巣に戻って来ると、まだ目も見えない2羽の子どものくちばしを引っ張り上げては口伝えに食べ物を与えている。(これは、ミルク状のもので雌雄ともに分泌するピジョンミルクという)

餌を待っている2羽の雛の寄り添う姿がなんとも可愛いくて、

つい手を出したところ、小さいながらもくちばしで威嚇してくる。親が帰ってくると、羽を震わせ、むさぶりつき親の口の中にくちばしを入れる。それも一瞬のことで、要領が悪いと一羽だけしか餌にありつけない時もある。そのうちに羽毛がなくなり羽をばたつかせ巣立ちの準備をはじめ。少しずつ金木犀の枝を伝って移動をはじめた。この頃になると巣立ちを促すのか、親の姿がたまにしか見えなくなる。こうなると更に関心を示し出した我が家の猫の監視も怠るわけにいかない。

孵化して17日目の4時過ぎ、金木犀の垣根に続くブロック塀に両親が来た。そのうちの一羽が巣に飛び込んで来るや3羽が同時に飛び立った。一瞬黒いものが横切った。胸騒ぎがした。あっ・・・カラスにやられた！ 急いで道に出てみた。地面に降りた一羽のハトはすぐお隣の屋根へ飛びあがった。親バトは向かいのアンテナに止まりしきりに鳴いている。畑まで出てみたがもう一羽の姿はみえない。

カラスの野郎が！カラスの野郎が！！と思いながら家に入った途端、道路側からハトの巣のある垣根をカラスがつつきに来た。このカラスだ！と確信した。巣立ち、初飛行、親も一緒だったというのになんてことを。

その日の夕方、巣には一羽だけが座っていた。一抹の望みも打ち砕かれた。こんなこともあるのか。弱肉強食の自然界の厳しい掟を目の当たりにした。猫には気をつけていたのに伏兵がいた。ハトの巣立ちを楽しみにしていた夫は、あのカラスは許せないと喚いている。

その後一羽のハトは裏庭のキウイの木をすみかにし、親と戯れていたがもう姿は見えない。私の眼の届くところで生まれ育ち、家族の在りようも教えてくれたキジバト。自然界で自由にたくましく生きて欲しい。

2009.6.

(S. K)

さつき展



愛媛新聞に掲載された、川内公民館で催されていたさつき展に夫と出かけた。

東温市でも重信川沿いで川内には近い方なのに訪れる事もなく、公民館へ尋ね尋ね辿り着いた。

お世話人の方が気持よく応対してくださり会場に入ったら、驚きというよりは、幽玄の世界へ導かれた様な気持ちになった。百鉢以上の花々が、扇を開いた様に美しく咲き誇り会場に来ておられる方々が、ここ迄育てるのは大変だったろうと、一つ一つの鉢に見入っていた。子育ても同じだろうと話しておられたが、もの言わぬ木々は子育て以上に難しいだろうと思った。でも朝夕に水やりをし話し掛けると木々の気持ちが分かり、子供には裏切られる事もあるが、会場に展示された花々は育てた方々に満足してもらった事だと思った。花卉の異なった物、赤、ピンク、朱、混ざり合った色などが枝も幹も見せない程に花々々でおおわれ、一つの世界や物語りを表現している様だった。

正面には市長賞など賞を頂いた作品が並べられていたが、どの花も賞をあげたらいいと思われる位立派だった。

いつ迄も見ていたい気持ちだったが、入口で小苗を頂き、即売もしていたので二鉢良い色合いのものを買って帰路に着いた。病弱な夫にも笑顔が戻り、「素晴らしかった。又来年も来たいね」と話し合った。

小鉢は早速、鹿沼土を買い、少し大きい鉢に植え替えた。立派な作品になっていた色混じりの中鉢は、我が家の玄関を彩っている。教えられた様に水やりをし、花摘みもしているので、来年も立派な花を咲かせてくれる事だと思っている。

さつき展を催された会員の皆様、立派な花々を鑑賞させていただき有難うございました。来年も是非訪ねたいと思っていますので、どうか素晴らしい花を育ててください。

(S a ・ K)

楽しい！！ わくわく*ドキドキ

3歳になる孫娘は、アンパンマンの大ファンである。

アンパンマンの歌を、振り付きで踊り歌う姿は真剣そのもの。

完全にアンパンマンを自分の世界に取り込んでいる。

ところで、アンパンマンに登場するキャラクターは2000を超える事をご存じだろうか？私は孫娘所有のアンパンマン図鑑を見せてもらい、そのことを初めて知って驚いた次第である。そのキャラクターは、果物や食品を始めとして身の回りの物を変身させて生み出されている。ページを繰る度にどんなキャラクターに出会えるかと、ワクワクしてしまう。そばにいる孫娘の目は喜びに輝いている。

アンパンマンの物語は全て、勸善懲悪である。

しかも物語の最後に、悪者バイキンマンが反省する姿が、時折見られることもあって、ほほえましい。アンパンマンは、教育的要素がある物語のお陰もあり、親たちの支持の元、子供達の生活に深く入り込んできている。

アンパンマンのキャラクターの絵入り商品は、服*靴*食器*文具など日常使う物に多く売られている。子供達は毎日、何かしらその商品を目にしているだろう。

またアンパンマンミュージアムは、高知と横浜に2カ所もある。

私は、娘夫婦と孫娘に連れられ、アンパンマン作者<やなせ たかし>の故郷である、高知県の小さな町に建つミュージアムへ去年行ってきた。

土曜日だったせいもあって、そこはたくさんの親子連れで賑わっていた。物語やキャラクターを紹介する部屋、作者紹介の部屋、キャラクターの大きな絵画を展示即売している部屋など思っていたより広いミュージアムだった。

別棟には、絵本図書館も併設されている。

次々と部屋を覗く度に孫娘はもちろん私までワクワクしてきていた。ミュージアム内を一回りして、入り口に戻るとアンパンマンとメロンパンナちゃんの着ぐるみを着たスタッフ？が来館者と写真を撮るサービスを始めていた。孫娘の興奮は、最高潮！ すぐにもアンパンマンのそばにいきたそうだったけれど、みんなが列を作って待っている。順番！ 順番！

孫娘は写真を撮る順番を待つ間、どんなにドキドキ*わくわくしただろうか？

順番が来たとき、彼女はアンパンマンに走り寄って、抱きついてた。見ている私達も幸せな気持ちになった瞬間だった。

帰りの車中でぐっすり眠る孫娘を見て、この子が今日一日で感じたわくわく*ドキドキ感を考えてみた。私も今日は、アンパンマンミュージアムで思わず ”わくわく” した気持ちの高まりを覚えたけれど、この子はきっと私では数え切れない ”わくわく*ドキドキ” を感じたのだろう。

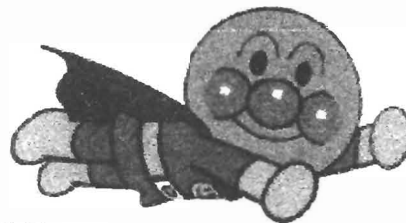
日常生活の中でも、映画を見たり本を読んだり、旧知の友と偶然会ったり、と ”わくわく*ドキドキ” する事は、私の身近にもある。改めて認識することはなくても、それらは心地よい波を私に与えてくれる。

毎日の生活の中で、この心地よい波が起きるとその日が気持ち良く過ごせる。

孫娘は、一日何回でも ”ワーすごい” と声を上げる。

私も孫娘を見習って、生活の中に楽しい ”わくわく*ドキドキ” をたくさん見つけていこうと、思っている。

R.D.



Copyright
© 2008 Anpanman Inc.





雑感

漸く梅雨入りし我が家の周りの田にも水が入りました。梅雨入りした翌日は久々にまとまった雨に恵まれましたがその後は晴天が続き、延期された夜間断水が実施されるのも時間の問題の様です。

先日、夫と書店で待ち合わせをした私はたまたま目についた“米原万里著「^{みづか}他諺の空似 ことわざ人類学」 光文社文庫”を購入してしまっていました。米原万里さんについての私の知識は、ロシア語の同時通訳者で数年前に若くして癌で亡くなったということ位でした。でも、帰宅後読み始めると、上品とは言えない挿話が少なくないものの、痛快で、2006年に逝かれた米原さんが生きておられたら今の世情をどんな風に喝破されたかと思うと残念です。解説の養老孟司氏は彼女の早すぎる死を惜しみ、彼女の代表作「嘘つきアーニャの真赤な真実」を読むことを薦めておられます。是非読んでみたいと思います。

少し前、NHKの“ラジオビタミン”で京都の法然院第31代貫主、梶田真章さんのお話に出会いました。梶田さんは大阪外国語大学ドイツ語学科卒業という異色の経歴の持ち主です。哲学者で神戸大学の教授でもあった父親の後を継いで1984年貫主となると父親の考え方でもあった“法然院サンガの理念—寺は開かれた共同体でなければならない”を追求し、様々な試みを実践しておられます。芸術家の発表の場やシンポジウムの会場として寺を開放。寺の境内で野鳥の観察をしていた同志社大学の久山さんとの出会いがきっかけとなり境内の環境を活かし、1985年“法然院・森の学校”という自然観察会を始め、1993年には境内に“共生^{きせい}堂＝法然院森のセンター”を新築。この建物を拠点に自然環境と親しむ活動を行う市民グループ“フィールド・ソサイエティー”の顧問に就任。FMラジオのトーク番組“京都三条ボンズカフェ”のパーソナリティーを務めるなどその活動は多岐にわたっています。

そんな彼が現代日本語で一番嫌いな言葉は<自然と人間の共生>だと言います。“人間は自然の一部であるにもかかわらず人間を別個の存在であるかのように捉える明治以降の西洋的な考え方は改めるべきである。自然とは目に見える対

象だけではなく自分自身も生かされている生き物同士の支え合いの仕組みのことであるという意識を取り戻したい。自分の命と他の命が別個に存在するのではなく自分が生きていること自体が他の命に支えられているということが共生の姿である。里山とじっくりと向き合うと生きとし生けるものにゆったりと平等な時間が流れていることを感じる事が出来る筈。” だと言います。納得です!!

自分が自然の一部であることを認識し総てのものと素直に向き合えば自ずと何を為すべきか、何を止めるべきかが見えてくるに違いありません。

テレビ朝日報道ステーションの特集でスパークリングワイン NOVO のことを知りました。2000年沖縄サミットの晩餐会で供されたワインだそうです。このワインは栃木県足利市にある知的障害者更生施設「こころみ学園」の園生によって作られています。50年ほど前、障害児学級の教師であった川田昇さんはどうしても社会に出ることの出来ない子供と生涯を共にする場として「こころみ学園」を開設されました。

川田さんは自著の中で“人が人間らしく生きるためにはある程度の過酷な労働は必要。どんなことに対しても「まだ出来る」と頑張り、「これでもか」と挑戦して汗を流して自分のものを築く。そういうことの大切さがわかった時、ほんものの人間になれるような気がする”と述べておられます。“疲れた後の休息の嬉しさ、空腹に耐えた後の食事の美味しさ、眠さを我慢した後の安らかな眠り、辛さを乗り越えてこそ大きな喜びが得られる。そうした体験を通じて意欲的になり情緒も安定する。”と。最初は何も出来なかった園生たちが傾斜38度の急斜面のブドウ畑を農薬も機械も使わず耕し続け、育て、収穫する“農夫”に変貌し、ある園生は100人近い入所者の洗濯物を間違いなく持主に届け、また別の園生は夫々の体調にあわせた配膳をやり遂げるまでの変化を見せたといいます。“大切に庇護するだけではなく一人一人が出来る仕事を担い、やり抜いて自信を得た結果”だと川田さんのお嬢さんで施設長の越知真智子さんは語ります。越知施設長は“情けだけで買って貰った商品にはリピーターはつかない。このワインが美味しいからまた買ったのよと言ってもらえるのが私達は本当に嬉しい。”とも。

川田さんのもう一人のお嬢さんは「こころみ学園」に併設されている COCO FARM & WINERY の専務としてお店のレイアウトや商品開発を担当しておられますが、彼

女は“働く”とは“はた（周り）”を“らく（楽）”にすることだと語ります。

障害と、在るが儘、共に生き、支え合う、本物に出会えた思いがしました。

それにひきかえヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで日本人初の優勝に輝いた辻井伸行さんについての報道は、彼が全盲であることばかりがあまりにも大きく取り上げられすぎているように思えて残念でした。もっと彼の奏でる暖かくて力強くかつ繊細で優しい音色に純粹に酔って欲しいものです。

五月三日憲法記念日の夜、NHK 教育 TV、ETV 特集「いま憲法 25 条“生存権”を考える」を観ました。1990 年代からの派遣労働などへの規制緩和に警鐘を鳴らし続けてきた経済評論家の内橋克人さんと貧困者支援活動をする「もやい」事務局長で昨年末の「年越し派遣村」の村長を務めた湯浅誠さんの対論でした。“生存権は全ての人に人間たるに値する生活の保障”“所有権の行使は同時に公共の福祉に役立つべきである”というドイツのワイマール憲法を手本に日本国憲法に取り入れられた“生存権”。両氏は、時の経済状況に左右されない国民の生存権を保障する義務が国家には有るにも拘らず、社会保障を企業内福祉に依存させてきたことが様々な悪循環を生み出していると言います。当初の理念は有名無実と化してしまっています。辛い思いの人達へのお二人の暖かさが溢れた対論でした。

折しも昨年末からの未だ嘗てない不況下、景気浮揚策が実施され、議論されています。残念ながら本当に助けを求めている人たちには役に立たないものが多いように思えてなりません。職を失い今日の生活に困っている人には住宅減税も、エコカー減税も、省エネ家電のエコポイントも、ETC 搭載車の休日 1000 円乗り放題も無縁のものです。それより雇用保険の完璧な整備、生活保護から切り捨てられた母子加算と高齢加算を復活し、最低賃金を引き上げ、障害者自立支援法を撤廃すべきです。不況の時こそ社会保障の充実が必要不可欠だと思うのです。

涼を求めて、初めて白猪の滝に出かけました。曲がりくねった登り坂の終わり近く突然眼前に現れた滝。息を呑みました。休んでいると軽やかに駆け上がってきた若者がいました。彼によるとこの日の滝の水量は雨不足で例年と比べると半分以下だそうです。冬に是非！とも薦められました。素晴らしい滝、爽やかな若い人、そして帰路ではヤマカガシにまで出逢った一日でした。 (K. O.)

お知らせ

・次回例会のお知らせ

7月8日(水) 12時半から 林宅にて

伊予銀行の地域環境活動への助成金申請について

6月例会で申請をすることが決まりました。7月例会では、内容を検討します。

楠先生に案内していただく自然観察会や自然観察カレンダーの発行などのアイデアが出ています。ぜひ、皆様のご意見をお寄せください。

*お昼時の例会ですので、それぞれお昼ごはんを持ち寄って食べながら話し合うのもいいかと思えます。多数の方のご参加をお待ちしております。

・読者の声・投稿などお待ちしております。



くらしの学習会では、随時会員を募集しています。

活動会員 2000 円/年 購読会員 1000 円/年

振込先口座番号(郵便局) くらしの学習会 01610—5—21026

問い合わせ先 TEL/FAX 089—964—6956(林)

E-mail: kt-hayashi@nifty.com

編集後記

先日、千葉にいる息子から、学会賞をもらったという記事が載っている業界誌が送られてきました。研究の内容は全く理解できませんでしたが、何だかうれしくてその記事をコピーして、親兄弟に送ろうと思っています。親バカだということはわかっています。でも、いくつになっても、親は、子どもの生活ぶりに一喜一憂するものですね。

さて、今回の会報の記事の中に、白猪の滝のことが出ていますが、ちょっと前に、うちも夫と二人で行ってきました。初めて行った夫は、東温市にこんな素晴らしいところがあることに感激！漱石好きの夫は、その昔、漱石もここを訪れていたことで一層の思いだったようです。白猪の滝の近くに、もう一つ漱石が訪れたという唐岬(からかい)の滝があります。ついでにと行ったのはいいのですが、大変な坂道を下っていかなければなりません。お陰で、普段使わない筋肉を一杯使って、翌日は筋肉痛でした。白猪ほど整備がされていませんが、滝は、なかなかのものでした。東温市って本当にいいところですね。(T.H)